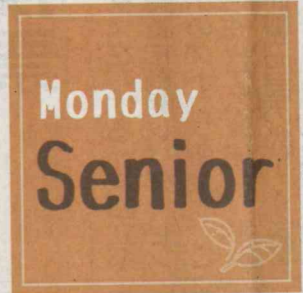


高齢者をはじめサポートが必要な人の外出を支援する介護技術の専門家「トラベルヘルパー」の活躍で、高齢者の旅の選択肢が広がっている。2009年に始まった認定資格を持つヘルパーは年々増え、現在は500人以上に。今年から大手旅行会社も参入するなど利便性も向上している。

「近所の墓参りに行き 長い階段を引つ張り上げたい」という小さなお出る際に声を掛けて手助け掛けから、「かわいい孫する人を探すなどの補助の結婚式に出たい」「もう大事な仕事だ。気晴らしの散歩で、話し相手に」といった希望までかなえてくれるヘルパー。埼玉県春日部市の山口初位さん(60)は85歳だった父板橋昌利さんと10年、鹿児島を訪れた。板橋さんは旧日本軍の元特攻隊員。「沖繩に散った仲間が最期に目にした薩摩の手伝いだけでなく、



趣味のカメラで、開聞岳を撮影する板橋昌利さん(右から2人目)。左端は介護タクシーの運転手。2010年、鹿児島県



選択広がる高齢者の旅

トラベルヘルパーが手助け

旅行会社も活用



家族らと知覧特攻平和会館を訪れた板橋昌利さん(手前)。2010年、鹿児島県南九州市

摩富士(開聞岳)を、自分も死ぬ前に一度、見ておきたい」と話していたが足腰が弱り、車いす生活が余儀なくされていた。山口さんはヘルパーを紹介する「あ・える倶楽部」で連絡を取り、担当したヘルパーの宇田川広子さんは車いすでも搭乗可能な航空機を手配。板橋さんは戦友と同じ空から開聞岳を眺め、静かに涙ぐんだという。知覧の史料館では自身が戦友に出したはがきが展示されているのを発見した。板橋さんは昨年死去。「今ごろ、雲の上で知覧の土産話をしているかも」と山口さん。「たくさんの人にトラベルヘルパーのことを知ってもらって、どんな外出してほしい」JT Bは2月から、首都圏発の旅行向けにヘルパーの紹介を始めた。担当者は「ヘルパーが全国各地で増加しつつある」と話し、今後も取り扱いエリアを拡大する方針だ。

日本トラベルヘルパー協会の篠塚恭一理事長は「空港や駅の案内はフリー対応が進んでいるが、問題はその後。飛行場まで連れていくヘルパーがいて、到着空港から旅行先を案内するヘルパーがいればどこへも行ける。ITの発達で各地のヘルパーとテレビ電話機能を通じて顔を見ながら話ができ、調整が格段にやりやすくなりました」と力を込めた。